

我を愛するか

——ヨハネ伝 21 章——

小池辰雄

1968年8月11日

子どもよ獲物ありしか 我を愛するか アガパオーとフィレオ一人称二人称の関係 キリストと我的関係は贖罪 汝知りたもう 活殺自在 伝道と殉道 パウロやヨハネはわが親友 信愛一如

【ヨハネ21】

¹この後、イエス復またテベリヤの海辺にて己を弟子たちに現し給う、その現れ給いしこと左のことし。²シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、³シモン・ペテロ『われ漁獵すなどりにゆく』と言えば、彼ら『われらも共に往かん』と言い、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。⁴夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、⁵イエス言い給う『子どもよ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答う。⁶イエス言いたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』すなわち網を下ろしたるに、魚夥おびただ多くして、網を曳ひき上あぐこと能わざりしかば、⁷イエスの愛し給いし弟子、ペテロに言う『主なり』シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを僅に五十間けんばかりなりしかば、魚の入りたる網を小舟に曳き來り、⁹陸に上がりて見れば、炭火ありてその上に肴さかなあり、又パンあり。¹⁰イエス言い給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』¹¹シモン・ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾ひの大なる魚満ちたり、斯く多かりしが網は裂けざりき。¹²イエス言い給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰だぞ』と敢えて問う者もなし。¹³イエス進みてパンをとり彼らに与え肴さかなをも然なし給う。¹⁴イエス死人の中より甦えりてのち、弟子たちに現れ給いし事、これにて三度なり。

¹⁵斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝まさりて我を愛するか』ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羔こひつじ羊を養え』¹⁶また二度



いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言う『主よ、然り、
わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羊を牧え』
17 二度^{みたび}いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを
愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。¹⁸ 誠
に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、
されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』
19 是ペテロが如何なる死にて神の榮光を顯すかを示して言い給いしなり。斯
く言いて後かれに言い給う『われに従え』²⁰ ペテロ振反りてイエスの愛した
まいし弟子の従うを見る。これはさきに夕餐^{ゆうけ}のとき御胸によりかかりて『主よ、
汝をうる者は誰か』と問いし弟子なり。²¹ ペテロこの人を見てイエスに言う『主
よ、この人は如何に』²² イエス言い給う『よしや我、かれが我の来るまで留
まるを欲すとも、汝になにの関係^{かかわり}あらんや、汝は我に従え』²³ ここに兄弟た
ちの中に、この弟子死なずと云う話つたわりたり。然れどイエスは死なずと
言い給いしにあらず『よしや我かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝に
なにの関係あらんや』と言い給いしなり。

²⁴ これらのことにつきて証^{あかし}をなし、又これを録^{しる}しし者は、この弟子なり、我
等はその証^{まこと}の真なるを知る。²⁵ イエスの行い給いし事は、この外なお多し、
もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載^のするに耐え
ざらん。

● 子どもよ獲物ありしか

いよいよ、ヨハネ伝21章、最後の章にまいりました。多分、これは1年半くらいかかりましたかね。この21章の記事はヨハネ伝だけです。25節でお終いか。ただ似たような記事がルカ伝5章にありますが、似たようなことがまたここに起きているわけです。

¹ この後、イエス復^{また}テベリヤ

ゲネサレ、ガリラヤ湖のことです。

の海辺にて己を弟子たちに現し給う、

南の方のエルサレムかと思つたら今度はガリラヤ。

「お前たちよりも先にガリラヤに行く」

と約束されたことが前にあります。そのとおりガリラヤに行つて現れた。

その現れ給いしこと左のごとし。² シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、
ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに
居りしに、



その中にはヨハネもいるわけです。

³シモン・ペテロ『われ漁獵にゆく』と言えば、彼ら『われらも共に往かん』⁴と⁵言い、皆いで舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。⁴夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、見ても見えない、認識しないというわけです。

⁵イエス言い給う『子どもよ、

「お前たち」という、可愛がつて言う言い方です。

獲物ありしか』彼ら『なし』と答う。⁶イエス言いたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』

ルカ伝の方の5章4節には、

「⁴……深處に乗りいだし、網を下して漁れ」（ルカ5・4）

と言われたですね。ここは舟の横ちよにいる。お前たちは灯台下暗しだと。

すなわち網を下ろしたるに、魚夥多しくして、網を曳き上ぐること能わざりしかば、⁷イエスの愛し給いし弟子、

即ちヨハネ、

ペテロに言う『主なり』

「主だよ」と。さすがにこのヨハネというのは非常に勘がいい。復活の時に、弟子の中で一番先にキリストを信じたのがやはりヨハネです。ペテロの方はまだちよつと驚いたり疑問に思つたりしてましたが、ヨハネは即刻信じてしまつた。信じ入ることの深さはヨハネが一番ですね。非常にスッとしているわけです。パウロは非常に劇的な男ですが、ペテロは、申し上げているとおり、波のような男です、浮いたり沈んだり。ヨハネはスーッと入つてしまつて

シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、

「そうか、主か」と。

裸なりしを上衣をまといて海に飛びいれり。

これはまたペテロらしい。

⁸他の弟子たちは陸を離ること遠からず、僅に五十間ばかりなりしかば、魚の入りたる網を小舟に曳き來り、⁹陸に上がりて見れば、炭火ありてその上に肴あり、又パンあり。

「魚とパン」はよく、この前も共観福音書で、「パンが五つに魚が二つ」ですか、何千人といふ人に食わしたという話がありました。ここにも「魚とパン」が出てくる。

¹⁰イエス言い給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』¹¹シモン・

ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾¹²の大なる魚満ちたり、「¹³」と数えた。これは事実そう思いたいわけです。ところが、学者というのはすぐいろん



なことを、また別なことを思いまして、この「153」という数は、ユダヤの「カバラ」という神秘的な消息の文書があるんですが、そこに「153」という数は過越の小羊のシンボルの数であるという。そういうことがある。それとこれがパツタリ数が合つてしまふものだから、

「ははあ、この「153」という数は実際は、本当は「153」ではなかつたけれども、キリストが過越の羔羊であるから、それにちなんでこここのところは「153」にしたのだろう」

というようなことを言うわけです。まあそうかもしません。象徴的な数だという。

斯く多かりしが網は裂けざりき。¹² イエス言い給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。

先にこのヨハネが言つてしまつたものですからね。

ここでもキリストは、パンと魚を与えた。

¹³ イエス進みてパンをとり彼らに与え、肴さかなをも然しかなし給う。

¹⁴ イエス死人の中より甦えりてのち、弟子たちに現れ給いし事、これにて二度なり。

復活のキリストがまた彼らに、しかもこれは夜明け、もう明け方ですから、太陽が昇つてから現れた。いかにこの復活のキリストがまた人をすなどるということを弟子たちに象徴的に顯されたかということだろうと思われます。

● 我を愛するか

¹⁵ 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか』

彼らよりも一番、お前が私を愛するかねと。これがやはり、「アガパオー」という、非常に高次な「愛する」という言葉がこの場合に使つてあります。「私をアガパオーするか」と。

ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

「今までこうやつておつかいしてきたので、あなたを愛していることはござ存じのとおりです」

と。この場合のペテロの「愛する」という言葉が今の言葉とちょっと違う。これは「フレオー」という言葉が使つてある。

イエス言い給う『わが羔羊を養え』

そうしたら今度は、イエスがそれに対して何を言われたかというと、「私の羔羊を養いなさい」と。もちろん、「羔羊」ということは伝道のことを意味するわけですが。

¹⁶ また一度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

この「愛する」もさつきの「アガパオー」という字。



ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』
これも違う言葉です。

イエス言い給う『わが羊を牧え』

今度は「羊」という字にちょっと変わっていますが。

¹⁷二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

今度はこの「愛する」という言葉を、ペテロが使った同じ言葉を使われたわけです。
ペテロ二度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわ
ぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』

これがやはり、「フイレオー」の方ですね。

イエス言い給う『わが羊をやしなえ。¹⁸誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若
かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人
に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』¹⁹是ペテロが如何なる死にて神
の榮光を顯すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『わ
れに従え』²⁰ペテロ振反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。これ
はさきに夕餐^{ゆうけ}のとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問い
し弟子なり。

これはヨハネです。

²¹ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』²²イエス言い
給う『よしや我、かれが我の来るまで留まるを欲すとも、

これは再臨のことです。

汝^{かかわり}になにの関係あらんや、汝は我に従え』

という問答がここにあるんですが。

ヨハネ伝の最後に、

「この21章の記事はもともとヨハネが確かに語つたことであつて、それをヨハネの
弟子たちが伝えたのだ」

ということは、24節をみると、

²⁴これらのことにつきて証をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、

「この弟子」というのはヨハネ。

我等はその証の真なるを知る。

「我等」というのはこのヨハネの門弟たち。こう普通、学者もみていくようです。

●アガパオーとフィレオー

「愛する」という言葉に二通り使つてあります、非常に簡単にいえば、「フイレオー」と
いう言葉は「好きだ、好む」という字です。「アガパオー」という方は、相手に己を与える



ような愛です。人間の感情の愛というものは、恋愛というのもあるし、いろいろあります。が、要するに、「アガパオー」という神的な愛が中心であることは、信仰者の極めて大事なことですけれども、人間が人間であるかぎり、好きだという面もあるし、感情にはいろいろなものがつきまとっているのは、これは具体的な人間ですよ。キリストだつてそつだと。マリヤだとか、マルタだとかというご連中は、

「キリストが愛していた」

というのは、普通の「フィレオー」という字が書いてある。ティリッヒという神学者も言つてますけれども、

「もし、アガパオーだけの愛であつたら、その人間はむしろ観念的である。また、『好む、好きだ』という愛であつたら、それは単なる肉的なものである」

と。具体的な人間というものはどちらの要素も持つていて、しかも、大事なことはこちら（アガパオー）が主導的であるということ。そういう、人間の心の動きというものは決して分析しきれるものではない。

「相手に己」を与える」

ということは、

「相手を救いあげる」

ということです。救いあげる、担いあげるという角度の愛がこの愛（アガペー）です。もちろん、この愛とこの「好む」（フィレオー）というのが相反する場合も、それは具体的な場合にもあるでしょう。それから、並行してくるような場合もあるでしょう。

「この愛でなければならない」

というような、何か狭苦しいようなことを言つても、それは本当の具体的な人間ではない、ということでしょう。

私たちが今、特に主題としようとするのは、そういつた愛の分析でも何でもない。このところで、キリスト自身が両方の言葉を使つていらつしやるところに、いかにキリストがまた自由な方であるかといふこともわかるわけです。

「何者にも勝つて私を愛するか」

と。キリストがこのような愛を求められたところは、他の共観福音書にもあるとおり、

「我よりも父母、何々を愛する者は我にふさわしからず」

と言つておられる。

● 一人称二一人称の関係

私たちは、「信仰」とか何とか言いましても、「信する」ということと「愛する」ということを何か別問題のように考えている人がよくあるわけです、クリスチヤンなんていいましても。けれども、私たちが



「神を信ずる」

ということは、なにも神の存在を信じているのではない。神の存在を客観的に信じるな
ていうことは、いわゆる

「客観的に信ずる」

なんてことはありえない。神さまというものを客観的に信ずるということはどういうことだ
と。そんなことはありはしない。

神というものは私たちにいつも、「汝」という、「われと汝」という関係で主体的に迫つて
くるものが神である。第三人称的に、客観的に第三者的に、神というものが関係付けられ
るものではない。それは考えられたる神にすぎない。活ける神というのは、考えられた神
とは違う。活ける神というのは、一人称、二人称の間でなければありえない。そういう関
係においてある。三人称的に神のことと言うということは、「について」語つているだけの
はなし。神について語り、神について思考しているだけのはなし。しかし、「神を」と言う
ときには、それは文法的には三人称的な言い方であつても、本当に神のことを言うときには、
それはどこまでも自覚は、一人称と二人称の間、対称的な間です。その間においてものが
言われていなければ、本当に

「神を語る」

ということにはならない。

だから、私が言いますように、これは神の前における告白であつて、あなた方に対する
説教ではない。その神は、しかしながら、私にとつてまたあなた方自身にとりましても、
どこまでもキリストにおいて顯れた神です。旧約聖書は、キリストにおいてではないかも
しません。けれども、旧約聖書における神を本当につかまえるためにはやはり、キリスト
の光において旧約というものが本当に読まれなければ、旧約の神すらも本当につかむわ
けにいかない。キリストというのはどこまでも神の具体的な現象面で、それを通して私た
ちには端倪すべからざる神を受けとる。キリストにおいてこそ神が信ぜられる、受けとら
れる。神を告白する。

「神を告白する」

ということ

「神を信ずる」

ことは一つのことになる。

それでは、キリストと我との関係は何か。この関係は、

「我もし汝の足を洗わなかつたら関係なし」かかわり

と言われたところにある。キリストと私との関係は、ローマ書7章にもあるように、

「ああ、悩める人なるかな、この死のからだ」
と言つて、自分を投げ出さなければならぬ。しかし、



「イエス・キリストなるがゆえに感謝する」と。これは即ち、自分の足を本当に洗ってくれたキリストである。贖罪をしてくれたキリストである。

●キリストと我の関係は贖罪

贖罪というのは要するに、「自分を贖いとつた」ということだ、徹底的にはつきり言えば。自分というやつを本当に贖いとつた。サタンから贖いとつた。これはサタンの勢力の中にあるのだから。罪と死と陰府の虜になつていて、そういうものから贖いとつた。これが即ち、キリストです。だから、キリストと我との関係はその贖罪においてある。それは十字架でもいいさ。無教会でもしょっちゅう「十字架」と言つているけれども。そのようにして贖いとつたものは何かと云うと、キリストが己を与えた「アガパオー」である、愛である、「アガペー」である。このアガペーという事態が、キリストと我との関係です。それはもうひとつ神から言えば、

「神の義がそこに顯れた」

という。これがローマ書3章で言つているところの、神の義が顯れる。キリストの贖罪といふ愛の行為によつて、神の義が顯れる。

「神の義は福音のうちに顯れた」

というのがそのことです。また、

「愛せよ」

と言うことのできる人は、キリストだけです。キリストは事実、私たちをまず愛してくれた、どん底から。キリストと私たち一人ひとりとの関係は、そのようにしてキリストは私たちを救いあげた。救いあげたと云うのに、それを受けとらなければそれだけのはなしです。

「いや、私はそんなことは信じません」

なんて。ああどうぞ信じなくたつていいですよ。しかし、キリストは私たちを、私を、あなた方一人ひとりを救つた。これがその関係です。キリストは愛した。だから、いいですか。

「汝、我を愛するか」

と問われた時に、その問う人が、

「お前を本当に私は誰よりも——誰がお前を愛するか。お父さんが、お母さんが、友だちが、先生が愛するよりも——私はお前を愛した。何よりも勝りて我は汝を愛した」

と、キリストはそれが言える人なんだ。キリストはかく一人ひとりに語つておられる。実力をもつて語つてている。それは、実は十字架の贖罪ばかりではない。この贖罪のあとに本当に生命を与える。

「私がお前を愛するのは、この生命を与えるため、永遠の生命を与えるためだ」



と、ヨハネ伝が言つているとおり。この「永遠の生命」を与えるには、どうしてもまず、贖いとらなければ、永遠の生命をやるわけにはいかない。死そのものに生命をやつたつてダメなんだ。死を滅ぼしてしまわなくては。罪そのものを、罪とか死というものの主体を滅ぼしてしまつた。罪の主体であり、死の主体である「我」というものをやつづけてしまつて、そして今度は、永遠の生命を与える。まあ何という凄い愛し方か。こんな愛し方は他にはありはしない。だから、

「何ものよりも、世の中のいかなるものよりも、どんなにお前と密接な関係の人たちよりも、私はお前を愛した」

と。そうでしょ。誰が私たちの生命を救つてくれるか。人間の誰が救つてくれるか。誰が罪を本当に贖つてくれたか。キリストのほかにこれだけのことをしてくれたものはない。

●汝知りたもつ

「信仰、信仰」なんて言つたつて、キリストの愛に圧倒されなくて何が信仰かと。私はもう「信仰」なんて言うのは嫌になつてしまつた。もう「愛」だけでたくさんだ。キリストの愛に徹底的に圧倒される。無教会が

「十字架、十字架」

なんて言つているが、本当にそれを受けとつてゐるか。命懸けで十字架から本当に生命を与えてゐる、死んでも死なない生命を与えてゐるところの、この実質は聖靈です。無教会だつてそういうことを言いますよ——私は今日は少し癪しゃくにさわつてゐるから、無教会のことを言うんだけれども——そういうようなことは言いましても、何を言つてゐるかと。私は無教会の本流に棹さおさしてからよく知つてゐる。

何といつても、ヨハネ伝は聖靈の書といつてもいいくらいです。ヨハネは聖靈の人です。この御靈がその愛の、生命の実質である。キリストの靈が。実はさつきの讃美歌に、

「御靈よ、くだりて」

とあるが、それはいいですよ。いいんだけれども、私には実際に正直、くだつてゐるんです、御靈が。ですから、なにかちょっと歌詞がしつくりこない。くだつてしまつてゐるものですから、御靈が来てしまつてゐるんですよ、私の中に。

「ずいぶん、先生は勝手なことを言うな」

と思うかもしません。私はもう正直、そうでなかつたら生きていられないものですからね。だから、フツと気がついてみると、もうちゃんとこの聖靈の世界にあるわけです。ヨハネが慕わしくてしようがないのは、そういうことです。どうぞ、若い方だつて、

「まあ先生くらいに歳とらなければそうならないか」

なんて、そうじやないですよ。あなた方だつてすぐなれるからね。信仰の事態に年齢なんか問題じやない。どしどし遠慮なく、私よりもつと深くなつてください。



とにかく、そういうことになつてしまつた。だから、
「もうこのわがうちなる御靈になんと感謝するか」

という、そういう讃美歌をつくりなかつたらいかんですね、新しく。
「我を愛するか」

と。キリストは私たちについに、贖罪をして永遠の生命をはつきりと顯して、
「さあ、この生命をお前たちの中に与えたぞ」

と。これがキリストの「十字架と復活と聖靈」の、切つても切ることのできない事態。これを私たちに与えてくれた。もうこれで愛は極まつてはいる。そのように、もう他の何ものをもつても代えることのできないこの愛です。

なぜ、今のクリスチヤンがこの福音の世界のもの凄い靈的な質、内容をもつともつと深く入れようとなつてはいか。すぐ、社会的実践だとか何とか、そういういた行動のことばつかり考えて、やれどうだこうだと議論しているんだよな。ディスカッショントークの、話し合いだと。もつと自分自身の存在そのものがもの凄いものになつていかなければダメです。

夏の特別集会という、ひとつのカイロスを皆さんがつかみそこなわないように。使徒的な靈的な次元を本当にものにしていく。もの凄い力が内側から働きますから、それから何でも具体的なことは自然に行きますよ。議論なんかいらん。自分でおのずからそうなつていきますから。大事なことは本ものを深く入れることです。

そういうことで、

「我を愛するか」

と。この「我を愛するか」と言つてゐる人が、いかに私たち他のものとは比較を絶する愛し方をもつて愛してくれたか。今も愛してゐる。これからもそうであるという、そういう人の言葉。そうしたならば、

「主よ、然り。わが汝を愛することは汝知りたもう」

というこのペテロの言葉が今度は、ペテロが言つた以上に私たちの告白となつてくるわけです。ペテロはこの時——しかし、ペテロのこの答えはまだ本ものの答えではない——まだちよつと浮いてゐる。ペテロは使徒行伝を通らなければ、本当のペテロにならないんだから。まだしようがない。

主を本当に愛する。

「主を愛する」

ということは逆にいふと、

「自分を憎む」

ということだよ。

「自分を、己を憎まざる者はわが弟子ではない」

と言われた。



● 活殺自在

山岡鉄舟という人は幕末維新のころの第一の剣客だつたそうだ。けれども、彼はついに一人も殺さなかつたという。私はこないだ偶然に言つたことが、山岡鉄舟によつてやはり証明されていたのだから、私は驚いてうれしかつた。

即ち、本当の日本刀は抜くためにあるのではない。本当の達人という者は剣を抜かない。抜かないで相手が参つてしまつた。たとえ抜きましても、決して斬らない。斬る必要がない。相手が参つてしまつた。宮本武蔵はちよつとまだ手前だつたな（笑）。そんなこと言つたらわるいかも知れないが、宮本武蔵も最後は斬りたくなかつたんだろうと思ひますけれども。

無剣の剣という。そうなると、これは本当に活殺自在ということになる。相手を本当に活かすのも殺すのも自在ということはどういうことか。イエス・キリストこそ活殺自在な人だつたんですよ。

「へえ、イエスは殺しましたか」

と思うかもしませんね。私たちは本当にキリストに殺さなければ生きはしない。だから、活殺自在という。

「もうキリストの他は何も要りません」

と、一切のものを棄ててしまつ、そういうように私たちの中から

「他のものは要らん」

と、自分で自分の我欲を断ち切ることはできませんよ。ところが、かくもキリストに愛されてしまつと、もう他のものは要らんと。これは私たちを本当の意味においてキリストは殺しているわけです。自我欲から殺している。自我欲からキリストは殺してしまつて、

「ああ、もう自分自身なんか問題じやない」

と、自分を問題としないような人間になつてくる。これを無的と言つたでしょ。自分を無にしてしまう。

「ああ、無こそ楽しい」

というよくな、

「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとし。一切の秘訣を得たり」

とパウロが言つた。そういうふうな具合に、もう欲を殺してしまつ。これはいわゆる禁欲とか何とか言つてゐるのとは違う。そして今度は、本当に変わると、

「万物をこれになお賜ざらんや」

とパウロが言つてゐるではないですか。ようすのものまで一切を賜るほどに、もの凄いこのキリストの生命に入ると、非常に全世界に對して主体的な存在になつていく。こういうのが本当にキリストが私たちを殺し、また活かしてゐる事態なんです。キリストの愛とうのはそういうことをする。ただ私たちを可愛がつてゐるような愛ではない。

「もうあなたの生命の他は要りません」



と言つて、他は何も問題でなくなるところに一遍来なければ、

「信仰のなんの」

なんて言つたつてダメです。「信する」とは、
「キリストの愛に圧倒される」

ことである。信すると言つたつて、何か信仰をエトバス（何ものか）としているようなことではない。無教会なんていうのはせいぜいそのへんだ。だから、我々の今の、使徒的信仰の世界に入つてきて、もう行くところはないですよ、正直。

「行くところはない」

と言つても、なにも武蔵野幕屋ということを言つているのではない。パウロ、ペテロ、ヨハネが伝えているところのこういう現実の他、行くところはないじゃないですか。

● 伝道と殉道

これが即ち、

「汝、我を愛するか」

「はい、あなたの他に私はもう天上天下何をか慕わん。ただ汝のみ」ということ。詩篇の73篇かどこかに書いてある。これがパウロがローマ書8章の終わりの方で絶叫しているところの、キリストの愛に圧倒されている言葉もあるわけです。

だから、この復活のキリストがかく問われたのも、

「やがて、しかし、私のこの問に対しても前は本当に答えをすることができるようになる」

と。まあペテロの答えなんか、キリストは本当に受けとつていやしない。まだ本ものではないから。そのうちにペテロが本ものになる。

¹⁷二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを

愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。

「本当に私を愛したら、お前はその愛をもつて他の人を愛せざるをえなくなつてくるぞ」

と。「養え」とか「伝道せよ」とは本当の意味において

「人を愛する」

ということです。言葉でも行為でも何でもみんなこれが伝道です。全部、伝道。道を伝える。道を伝えるのは、無言であつても、いくらでも伝わる。「伝道」という言葉はいい言葉だよ。本当の道を伝える。

とは、「わが羊を養え」



「私の愛を受けたら、お前は羊を養わざるを得なくなる。生命を本当に人に与えざるを得なくなつてくるぞ」

ということ。

「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」

と。非常に復活のキリストがかく畳みかけてペテロに印象付けた。ペテロは三度、キリストを否んだでしょ。だから、キリストはもう一遍ひつくり返して三度、キリストはこのペテロに印象付けた。この言葉は、ペテロは忘れるわけにいかない。そして今に、

¹⁸誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、

されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれんと。これは十字架の殉教の死です。私と同じように十字架の死だと。キリストを愛する者は、これは殉教の覚悟である。「殉教」と言つたつて、なにも本当に人に刺されることばかりが殉教ではない。要するに、この道に殉じて死ぬことです。「殉道」といつた方がいいいくらいだ。道に殉ずる。そんなことを言つたのは今日初めてだ。殉道者。私たちはキリスト道に殉ずる。それは殉じますよ、道には。

「道に殉ぜずして、いざこに本当の勝利ありや、いざこに栄光ありや」と。こういうわけです。私はその点で一步も退かん。このパウロさん、ペテロさん、ヨハネさんの信仰を、この信を、この同質の信を、御靈の信が共通になつてきて、もういかなるものとも、絶対に交換するわけにはいかん。それは聖靈の確信と、聖靈の權威は私たちをしてかく言わしめる。

その劍の達人がやはり非常に恵みの深い魂だね。夏になると鰻がたくさん殺される。鰻を毎朝、三匹ずつ鰻屋から買つてきて、そしてそれを四谷のお堀の中に放してやつた。山岡鉄舟とはそういう人かと思つて、私はじーんときた。そして、鰻を放す時に南無阿弥陀仏と称えたという。

とにかく、本当の魂といふものは平伏しの、畏るべきものを畏れていた魂です。今、一番、今の若い青年に言いたいことは、

「畏るべきものを忘れるな、とんでもないことになるぞ」

と。三派全学連なんて、あんなのはしようがない。畏るべきものを忘れて畏れなければ、必ずこれは刈り取るもの刈り取らざるを得ない。人間は絶対者の前に平伏すことを忘れたらお終いです。何でも要求することばつかり考えている。とんでもない。

●パウロやヨハネはわが親友
そこで、キリストが三度、
「我を愛するか」
と問うた。そして、



「私の道にお前は行くぞ」

と、ちゃんとペテロの殉教の死までキリストは見ておられた。これはペテロはもはや死んでも死なないペテロになります。その時に神の栄光を現す。

¹⁹是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顯すかを示して言い給いしなり。斯く言ひて後かれに言い給う『われに従え』。

私たちはもうこのヨハネ伝の最後にきて、

「我を愛するか」

という、このキリストの問を私たちは深く自分に問い合わせられている問として、この「我を愛するか」ということに本当に、

「あなたの他に愛するものはありません」

と、そのことを言える人は一切のものを愛する人なんです。「あなたの他に愛するものはない」と言い切ることのできる人が、何ものでも本当に愛することのできる人です。それはアガペーの愛が、キリストの愛がその人を通して働くから。敵をも愛することができる。何となれば、敵を本当に救いあげることができる。

「ああ、無教会はパリサイだ、氣の毒だ。何とかしてこれを救いあげてやりたいものだな」

と思つて、私は胸の中が痛むよな、正直。今度は、『興文』に藤井先生のことを書いたけれども、私はそこまで本当は書きたかった。けれども、それを書くのはやめたよな、

「無教会のために痛む」

なんてね。やめたけれども、本当は書きたかった。

あなた方は非常に大事な線に来ているんですから、この無碍の一^{むげ}道を直進してください。そして、うんと深く、また極めて高く、また極めて広く。この深さと高さと広さというものは矛盾しない。深くなればなるほど高くなる。そうすると今度は本当に広くなる。この三つの次元が不思議に展開する。それが本当に健全な、自在な、無限な、無量な、このヨハネ的生き方なんです。

ヨハネ伝だけは、私は本当に正直、本にしたいよな。他は何もしなくていい。昔は「詩篇、詩篇」と思つていた。まあ詩篇もやるつもりですけれども、いろんなものをたくさん書かなくたつていいから。まあ折角やつたから、エペソ、ピリピ、コロサイはパウロの獄中の書簡でね、この獄中の書簡は本当に、パウロさんがあれだけの患難を通つて、そして牢屋の中でかくの如き音信をしている。パウロはまた素晴らしい。何といつても、使徒たちの次元はいい加減な次元ではないですから。私たちは限りなく、使徒たちが慕わしい。

「あなたの親友は誰だね」

「パウロだよ、ヨハネだよ」

と、あなた方はそう言えるような人になつてください。



「もう言えますよ」

なんて、いいですよ。パウロ、ヨハネが本当に親友となり、キリスト一切となる。

●信愛一如

キリストが私たちに

「我を愛するか」

と聞かれたら、もうただ平伏して、何も答えられないです。「愛します」なんて言えない。もう平伏すだけ。平伏して、もうキリストにしがみついていくばかりです。何となれば、「我を愛するか」と問われた時に何をもつて答えるか。わが胸のうちの、わが腹の中の聖靈が答えたもう。いいですか。わが腹のうちの聖靈が答え給うから、口先で、頭で何も答えないでいい。

「我を愛するか」

「はい、私のうちのあなたの御靈がお答えしております」

と。それだけです。もう私は極まつてしまつてどうにもならん。それがあなた方の信であり、あなた方の愛である。信愛一如です。

「私がわからないか。我を見よ」

と。いろんなことを言つてくるやつらに、あなた方はそう言いなさいよ、権威をもつて。もう、一言をもつて答えればいい。

私たちはその点でもつて一つです。ある本に、「グラウベン」（信する）ということは「ゲロウベン」ということだと書いてあつた。「ゲロウベン」という言葉は今のドイツ語では「誓う」という言葉ですけれども、この場合の「ゲロウベン」というのは、「ゲ・ロウベン」で、「誓う」という意味ではない。この「ロウベン」という言葉は、「ロウベン」（讃め讃える）、「リーベン」（愛する）、「レーベン」（生きる）、みんなこれは通ずる。もうキリスト一切として、キリストを讃め讃えることと同時に、愛することであり、同時に生きることである。これが「グラウベン」（信する）ということで、

「信仰とは讃美し生きまた愛することである」

なんて書いてあるおもしろいドイツ語があつた。全くそうなんです。ですからもう、一つです。

今度のエペソ書は凄いですよ。ある意味において、エペソ書は絶頂みたいなところです。とても解説なんかできる世界ではない。もの凄いです。

そういうわけで、もう他に何も言つことはない。どうぞ、「我を愛するか」と。これは平伏して、御靈をもつて答える。その他になしと。おしまい。

